

令和 6 年 6 月 4 日現在

機関番号：14101

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K12999

研究課題名（和文）使役をめぐる諸構文の意味解釈とモノの存在論に関する日独対照研究

研究課題名（英文）Semantic interpretation of constructions relating to causation and ontology of objects: A contrastive study of Japanese and German

研究代表者

高橋 美穂 (Takahashi, Miho)

三重大学・人文学部・准教授

研究者番号：40787610

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究課題は、使役に関わる日独語の諸構文の対照研究により、言語間に通底する態の交替現象の原理を明らかにすることを目的とするものである。この目的のもと、使役と経験という両義的な解釈が可能なドイツ語と日本語の構文を対象に、構文の意味解釈のメカニズムを究明した。動詞の語彙的意味が構文の本来の意味あるいは副次的意味の創発にどのように作用するのかを探ることで、日独語のヴァレンス拡大現象で認められる共通の意味論的基盤を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

事態の引き起こし手である「使役主」がどのように符号化され、また読み込まれるかという対照言語学的・類型論的観点から取り上げられる問題について、ドイツ語と日本語の使役に関わる諸構文を例に、構文の意味解釈に対する動詞の語彙的意味の作用および動詞の意味論に基づく語用論的推論の働きの一端を明らかにした。日独語の態の交替現象について、個体と事象との間の広義の所有関係（人による「事象の所有」）というアプローチが妥当することを示した。

研究成果の概要（英文）：This research project delves into the intricacies of voice alternations in languages, focusing on Japanese and German constructions related to causation. In line with this objective, the study investigated the mechanisms of semantic interpretation, concentrating on constructions in both German and Japanese that exhibit semantic ambiguity, allowing for interpretations of either cause or adversity. By examining how the lexical meaning of verbs influences the emergence of inherent and peripheral meanings within these constructions, the study reveals a shared semantic basis for valence expansion across both languages.

研究分野：言語学、ドイツ語学

キーワード：ドイツ語 日本語 使役 構文の意味 語彙的意味

### 1. 研究開始当初の背景

使役・反使役をめぐる言語現象は、通言語的・個別言語的に大いに注目を集め、研究が盛んに行われてきたトピックのひとつである。ドイツ語では、語彙的使役動詞に *zerbrechen* 「壊す／壊れる」のような自動詞との交替を示すもの（以下「他自動詞」）と、*öffnen* 「開ける」／*sich öffnen* 「開く」のような再帰動詞との交替を示すもの（以下「他再動詞」）とがあることから、その統語的派生の仕組み (Schäfer 2008) と並び、両者にどのような意味的差異を見出すかに関心が注がれてきた (Aoki 2010, 大矢 2008)。その一方で、これらの使役・反使役動詞が他のどのような構文でどのような読みを伴って現れるかについてはあまり注目されてこなかったと言える。このような従来の学問的潮流に対し、研究代表者は本研究開始以前に、反使役動詞が動詞のヴァレンス拡大現象である「自由な」与格構文で用いられる場合を調査し、構文の意味解釈で働く原理を探った。自由与格構文は、主に「表される事態から与格が影響を被る」という「経験」(被害や受益)を表すものであるが、*zerbrechen* のような他自動詞が現れる環境では「経験」と並び「表される事態を与格が意図せず引き起こす」という「意図せぬ惹起」解釈が可能となることが知られている (例: *Mir zerbrach die Vase.* 私にとって不都合(好都合)なことに花瓶が壊れた〈経験〉／私は意図せず花瓶を壊した〈意図せぬ惹起〉)。それとは対照的に、*sich öffnen* のような他再動詞の自由与格構文では「経験」解釈のみが可能である (例: *Mir öffneten sich die Tür.* 私にとって不都合(好都合)なことにドアが開いた〈経験〉)。調査の結果、他自動詞と他再動詞には前者が対象の存在自体が消失する変化を表す一方で、後者は対象の存在が保持されたままその性質や性状の変化を表すという違いがあること、さらに自由与格構文で可能な解釈がこの意味対立によって条件付けられることが明らかになった (Takahashi 2017)。

このようにドイツ語では、「存在の消滅」対「存在の持続」が反使役の構文で形態的差異(自動詞か再帰動詞か)として出現するのみならず、ヴァレンス拡大の自由与格構文においてその意味解釈の基底をなす。態の交替という言語体系の根幹をなす部分で作用する「存在の消滅」対「存在の持続」は、他の言語ではどのような変化動詞に語彙化され、また、どのような構文的反映が見られるのだろうか。この問題意識のもと、本研究課題では、変化動詞に内在する「存在の消滅」と「存在の持続」が使役をめぐる諸構文の意味解釈をどのように条件付けるのかを、研究代表者がこれまで研究対象としてきたドイツ語のみならず、日本語との比較・対照を行うことで究明することとした。

### 2. 研究の目的

本研究課題では、モノの存在論を手掛かりにドイツ語と日本語の使役をめぐる諸構文を探り出し、態の交替で働くメカニズムを解明することを目的とした。研究実施期間を通して、ドイツ語の使役・反使役動詞に見られる対象(モノ)の存在論に関わる意味対立—「存在の消滅」対「存在の持続」—が日本語のどのような変化動詞で認められるのかを検証し、さらに、語彙的意味が使役をめぐる諸構文の意味解釈、とりわけ構文の副次的意味の創発においてどのように作用するのかを究明した。

### 3. 研究の方法

上掲の目的のもと遂行される本研究課題では、形式と意味との対応について、意味から形式へというアプローチを採用した。まず、個別言語研究の観点から常に関心を集めつつも、従来別個のものとして取り上げられてきた現象を態の交替という同軸上に位置付けて論じた。この手法により、使役に関わるドイツ語の諸構文として、自由与格構文、*bekommen* (= *get*)+PP (過去分詞) 構文、*lassen* (= *let*)使役文を分析の射程に収めた。さらに、形式(カタチ)の共通性に依っては比較されることのないドイツ語と日本語の構文を対比させ、共通の意味的基盤上でパラメータ化することを試みた。具体的には、経験と使役という両義的な意味解釈が可能となるドイツ語の自由与格構文と日本語の「-させ」使役文を対象にその意味解釈のメカニズムを探った。

研究実施期間は当初3年間(2020年度~2022年度)の予定であったが、本研究課題の目的をより精緻に達成するための研究(学会発表並びに論文投稿)を実施するため、研究実施期間(補助事業期間)の1年間の延長を行い、2023年度を最終年度とした。研究初年度(2020年度)には、計画段階で予定していたとおり、ドイツ語の諸構文(自由与格構文、*bekommen*+PP 構文、*lassen* 使役文)の予備調査・研究の再検討、並びに予備研究の理論面での検証を行った。その結果をうけて、自由与格構文、*lassen* 使役構文、および英語の *have* 使役文の比較を行った。英語の *have* 使役文は、先行研究において日本語の「-させ」使役文との類似性が指摘されるものであり(例えば Ritter and Rosen 1993)、日独語の諸構文を比較・対照するにあたり、研究の一助となるものであった。研究実施期間2年目(2021年度)には、主としてドイツ語の経験的データの収集と分析を行った。具体的には、状態変化動詞 *zerbrechen* および *öffnen* の事例を大規模コーパス DeReKo より収集し、使役形と反使役形の頻度分析を行った。3年目(2022年度)には引き続き、ドイツ語の使役・反使役動詞に関する経験的データの収集と分析を行いつつ、自由与格構文に関して、状態変化動詞および移動動詞を例にコーパス (DeReko)の実例に基づき構文の意味解釈のメカニズムを分析した。移動動詞はその語彙的意味によって求められる経路項の表出に応じて、

非限界的な「過程」(process)を表すこともあれば、限界的な「状態変化」(change of state)を表すこともある。この統語的・意味的性質に鑑みて、移動動詞を状態変化動詞の比較対象とし、自由与格構文の意味解釈と動詞の語彙的アスペクト(=Aktionsart)との連関を探究した。最終年度(2023年度)には研究成果の総括を行い、論文発表のかたちで研究成果を公にした。

#### 4. 研究成果

日独語の構文の対照研究の成果として、以下、ドイツ語の自由与格構文と日本語の「一させ」使役文を比較・対照した結果を報告する。自由与格構文と「一させ」使役文は、事態から影響を被る「経験主」とその逆の事態の引き起こしに関わる「使役主」とが同一の構文で競合する点で共通性がある。自由与格構文が典型的には反使役の他自動詞が出現する環境下でその本来的な意味である経験のほかに「意図せぬ惹起」という副次的な意味を得る一方、「一させ」使役文は一定の環境下で使役と並び経験(被害)の解釈を帯びるという点で異なる(例:彼は子供を[事故で]死なせた、社長は[不景気で]会社を倒産させた)。

##### 【ドイツ語の経験的データに基づく研究成果】

コーパスからの事例に基づく調査・分析の結果、ドイツ語自由与格構文の「意図せぬ惹起」解釈が、先行研究で指摘される他自動詞(zerbrechenタイプ)のほか、この読みを阻むとされる他再動詞(öffnenタイプ)においても観察されることが明らかとなった。本研究の開始当初は「存在の消滅」対「存在の持続」という動詞に内在する性質が自由与格構文の解釈を規定すると想定されていたが、経験的データに依る分析をすすめた結果、対象物(モノ)の存在に関わる動詞の意味論は自由与格が「(非意図的)使役主」と解されるかどうかを直接に左右するわけではないことが示された。この読みにとって重要なのはむしろ、「変化前の状態が維持されることが期待されるにもかかわらずその状態が解消されるような変化(コト)が発生した」という潜在的矛盾とも言える意味的背景であると考えられた。他自動詞にせよ他再動詞にせよ、状態変化動詞では初期状態からそれとは相反する終結状態への移行が表される。状態変化動詞が自由与格によって拡張された場合、新たに追加された参与者である与格は第一義的には事態の「経験主」である。その際、与格と表される事態との関わりに照らして、経験主は変化前の「初期状態を維持できたはず」であり、その初期状態が解消されるということは、「表される事態に経験主は消極的ながらも関与した」という推論が働き、「意図せぬ惹起」読みが得られる。また、この意味的背景が活性化しやすいのは「存在の消滅」が表される他自動詞であり、「存在の持続」を含む他再動詞では往々にして文脈による支えが必要となる。例えばzerbrechenではその語彙的な意味に鑑みて「放っておけばそのままであるものが(何らかの原因によって)壊れる」と了解されやすいのに対して、他再動詞の代表例である(sich) öffnenでは初期状態の継続(対象が閉まったままであること)が見込まれるという含意は特段ない。このように、自由与格構文の解釈(とくに「意図せぬ惹起」読み)は、統語的性質の別(自動詞か再帰動詞か)に負うのでもなければ、動詞の意味論に完全に依るのでもなく、動詞の非構造的な意味の性質に負いつつも、ときに都度の文脈で下支えされる意味的推論によってたらされることが、経験的・実証的に明らかとなった。

##### 【日独語の対照分析に基づく研究成果】

対照分析の結果、ドイツ語の自由与格構文で「(非意図的)使役主」読みをもたらす意味的背景—「初期状態の継続が期待されるにもかかわらずその状態が解消されるような変化(コト)が発生する」—は、日本語の「一させ」使役文において、基底動詞の項構造に対して新たに追加された項である主語の「経験主」読みを導くことが示された。この意味的背景が活性化されるのは、例えば「死ぬ」のような往々にして望ましくない、対象の(不可逆的)変化を表す動詞のもとであることが考えられた。さらに、使役と経験という両義的な意味解釈が可能となる背後には、個体と事象との間の広義の所有関係(人による「事象の所有」)という共通の意味論的基盤があり(この方向の先行研究としてはFujinawa and Imaizumi 2010が挙げられる)、日独語の構文がこのアプローチにより統一的に捉えられることが示された。

##### <引用文献>

- Aoki, Yoko (2010) “Reflexive Inchoativa im Deutschen und ar-Inchoativa im Japanischen: Das Antikausativ in lexikalisch-semantischer Hinsicht,” *Neue Beiträge zur Germanistik* 9, no. 1: 57-72.
- Fujinawa, Yasuhiro and Shinako Imaizumi (2010) “Zwischen Possession und Involviertheit: Zur semantischen Basis der Valenzerweiterung im deutsch-japanischen Kontrast,” *Neue Beiträge zur Germanistik* 9, no. 1: 73-90.
- 大矢俊明 (2008) 『ドイツ語再帰構文の対照言語学的研究』ひつじ書房.
- Ritter, Elizabeth and Sara Thomas Rosen (1993) “Deriving Causation,” *Natural Language and Linguistic Theory* 11, no. 3: 519-555.
- Schäfer, Florian (2008) *The Syntax of (Anti-)Causatives: External Arguments in Change-of-State Contexts*. Amsterdam: Benjamins.
- Takahashi, Miho (2017) “Affiziertheit und unabsichtliche Kausierung: Lesarten der Dativkonstruktionen bei Bewegungs- und Zustandsveränderungsverben,” *Deutsche Sprache: Zeitschrift für Theorie, Praxis, Dokumentation* 45, no. 4: 362-377.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 5件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 高橋美穂	4. 巻 41
2. 論文標題 経験主と使役主のコード化 日独語の構文に見る「事象の所有」	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 人文論叢：三重大学人文学部文化学科研究紀要	6. 最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Miho Takahashi, Yasuhiro Fujinawa	4. 巻 6
2. 論文標題 Von der Auxiliarselektion zur Aktionsart: Eine Diskussion anhand der Lesarten von freien Dativen bei Antikausativa und Unakkusativa im Deutschen	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 Linguisten-Seminar : Forum japanisch-germanistischer Sprachforschung	6. 最初と最後の頁 82-99
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11282/jggls.6.0_82	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 今泉志奈子・藤縄康弘・米田信子・高橋美穂	4. 巻 -
2. 論文標題 状態変化動詞と事象の所有 経験主の語彙表示をめぐって	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 岸本秀樹・臼杵岳・于一楽 [ 編 ] 『構文形式と語彙情報』	6. 最初と最後の頁 280-303
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 高橋美穂	4. 巻 -
2. 論文標題 移動動詞と経路項の共起について laufenとその不変化詞動詞を例に	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 カンミンギョン・時田伊津子・藤縄康弘 [ 編 ] 『ドイツ語学への視点・ドイツ語学からの視座 成田節教授退職記念論文集』	6. 最初と最後の頁 169-184
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高橋美穂	4. 巻 7
2. 論文標題 ドイツ語と英語における使役に関わる構文 自由与格, lassen使役, have使役について [研究ノート]	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 東北大学言語・文化教育センター年報	6. 最初と最後の頁 73-80
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Miho Takahashi	4. 巻 3
2. 論文標題 Ueber die Asymmetrie von "Ursprung" und "Ziel": Eine korpusbasierte Studie am Beispiel der Partikel- und Doppelpartikelverben der Fortbewegung mit fahren	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Linguisten-Seminar: Forum japanisch-germanistischer Sprachforschung	6. 最初と最後の頁 33-49
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11282/jggl.3.0_33	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Miho Takahashi	4. 巻 -
2. 論文標題 Zur semantischen Ueberlappung von "Kausierung" und "Involviertheit": Ein deutsch-japanischer Vergleich	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Yoshiyuki Muroi (ed.). Einheit in der Vielfalt? Germanistik zwischen Divergenz und Konvergenz: Asiatische Germanistentagung 2019 in Sapporo	6. 最初と最後の頁 742-749
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

[学会発表] 計5件(うち招待講演 0件/うち国際学会 2件)

1. 発表者名 高橋美穂
2. 発表標題 ドイツ語と日本語の移動表現の比較 『モモ』の一場面を例に
3. 学会等名 日本独文学会東海支部2023年度夏季研究発表会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 高橋美穂
2. 発表標題 非対格性・使役性・アスペクト 移動動詞を例に
3. 学会等名 京都ドイツ語学研究会第109回例会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Miho Takahashi, Yasuhiro Fujinawa
2. 発表標題 Lesarten des freien Dativs und haben/sein-Selektion
3. 学会等名 日本独文学会第48回語学ゼミナール(国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 高橋美穂
2. 発表標題 ドイツ語与格構文の解釈 移動動詞を例に
3. 学会等名 研究会「所有・所在概念の連続性とその言語化にはたらく諸条件に関する言語横断的比較対照研究」 科研費 基盤研究 (C) 18K00538
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Miho Takahashi
2. 発表標題 CAUSE und verwandte Satzkonstruktionen im Deutschen und Englischen: freier Dativ, lassen-Kausativ und have-Kausativ
3. 学会等名 日本独文学会語学ゼミナールオンライン・2020(国際学会)
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------